
 学 会 記 事

第 4 回新潟胆道疾患検討会総会

日 時 昭和60年11月2日(土)
 会 場 新潟ワシントンホテル
 大和の間

一 般 演 題

1. 瀰慢性肝疾患における胆嚢超音波像の検討

岸 裕・大野 隆史 (新潟大学)
 西川 温博・尾崎 俊彦 (第三内科)
 市田 文弘

胆石・胆嚢炎・胆道疾患でしばしば見られる胆嚢壁肥厚の所見は超音波検査上、他の疾患においても時に観察される。今回、過去4年間約5,000例の超音波検査例より、胆道疾患を除外した上で壁肥厚のみられる例、66例について検討した。集計結果は、肝硬変、急性肝炎が多く、又、要因としてはT-bil、腹水、壁肥厚の型を検討したが腹水の多寡は厚さ、型のいずれとも関連せず、T-bilは厚さ、型とも関係し、T-bil低値では薄く一層肥厚型が多く、高値ではぶ厚く三層肥厚型が多かった。疾患別では急性肝炎に三層肥厚型が多かったがこれは急性肝炎は高ビリルビンとなる為、T-bil高値の方に多くなる三層肥厚型が多いのではないかと思われた。以上より、胆嚢型の超音波上の肥厚の所見は、びまん性肝疾患において、肝内胆汁うっ滞の病態の把握に役立つものと思われた。

2. 胆石症における血清および胆汁中

ビタミンB₁₂について

吉岡 一典・阿部 僚一 (県立吉田病院)
 外科

宮下 薫・福田 喜一 (新潟大学)
 第一外科

ビタミンB₁₂(VB₁₂)は他のビタミン同様肝に最も高濃度に存在し、胆汁中に排泄され、回腸において再吸収される腸肝循環を行っている。

セファデックス固相法によるVB₁₂測定用キットを用い、胆石症例を中心に血清と胆汁中VB₁₂濃度を測定し、次の結果を得た。①胆石症例の血清VB₁₂は男女それぞれ1287.9±532.0pg/ml, 1114.5±683.3pg/mlと正常範囲(N. 300~960pg/ml)を上まわった。②胆

汁VB₁₂でも男女とも40.9±33.7ng/ml, 25.9±28.3ng/mlと高値(N. 5~14ng/ml)であった。一方胆嚢癌では胆嚢管閉塞などのためか正常以下であった。③黄疸例あるいは減黄施行例での肝障害、腸肝循環の途絶はVB₁₂の代謝に大きく影響する。

以上、胆石症あるいは閉塞性黄疸症例のVB₁₂代謝過程での異常を示唆した。

3. ヌードマウス移植ヒト肝芽腫における脂肪酸結合蛋白(FABP)産生能について

鈴木 利光・広田 雅行 (新潟大学)
 第一病理

FABPは分子量約14,000、肝型と腸型とがあり、主に脂肪酸代謝に関与する。またラット肝FABPとヒト肝FABPとはアミノ酸組成上82%の相同性を有し、今回用いたラット肝精製FABPに対する抗体はヒト肝FABPをも認識する。ヒト肝FABPは個体発生学的には胎令7週にはじめて出現し、胎児期に最も強く発現している。このことから肝芽腫がFABP産生能を有するであろうことが強く期待され、ヌードマウス継代移植腫瘍HBL- α -nuを抗FABP抗体で染色した。その結果、腫瘍細胞の約30%が陽性に染色された。陽性細胞は主に類洞あるいは毛細血管周囲に多く認められた。一方、HBL- α -nuはAFPも産生し、ヌードマウス血清中のAFP値は1,400 μ g/mlである。免疫染色でAFP産生細胞は5~20%の頻度に認められ、FABP産生細胞よりも少なかったが、その分布様式はお互いに類似し、主に血管周囲に出現していた。

以上、FABPがAFP同様一種の癌胎児抗原である可能性が示唆されたので、今後さらにその性格を明確にしていきたいと考えている。

4. 肝門部に膿瘍を形成し、化膿性胆管炎を併発した良性胆道狭窄の1例

太刀川 朗・山川 良一 (下越病院)
 安達 哲夫・五十嵐 修 (内科・外科)
 富樫 昭次

鬼島 宏・渡辺 英伸 (新潟大学)
 第一病理

症例。61歳、女性、悪寒、戦慄で発症。右季肋部痛、黄疸と症状が進行し入院となった。腹部超音波検査にて、肝内胆管の拡張と肝門部の腫瘤を認め、PTCを施行したところ、肝門部に総胆管と交通を持つ膿瘍を認めた。ドレナージと抗生剤による治療で経過は良好であったが、画像上総胆管の狭窄所見が認められ手術を施行した。術